

一、エルサレムの會議に就て 龜谷宥英氏
 一、宗教の本質的要素としての供犠觀念 文學士 赤松智城氏

赤松文學士は先づ如何なる意義にて供犠の觀念が宗教の本質的要素なるかといふことより説き起し、供犠なければ宗教上の儀禮は完成せざるものとし、次にその性質、起原、一般的形式及び種類に就て引證説明せられ、最後に *Sacrifice of God.* に至りて供犠はその究竟の境に達するものなりと述べられたり。

來會者松本、波多野兩教授、日野講師、學士學生二十名。

印度哲學讀書會

三月二十三日午後一時より印度哲學研究室に於て開催、

一、順世外道の學說 本田文學士

Madhva, Sarvadar, Anandghan を中心として印度快樂主義の代表的學派たる順世外道の論理的主張とその思想の紹介。

新著紹介

現代日本人の信仰

文學士 飯沼龍遠 著

回顧すればスターバック教授が其「宗教心理學」を公けにせられてから、既に十年の歳霜を経過した。今氏の影響の下に極東の地に英俊の好著を産出するを見て其響應するところの頗る大なるを感ぜずには居られない。有體には余はス氏の彼の著の學術的價值につきては今尙疑問の裡に彷徨する者である。又其著が所謂世界的名聲を克ち得たにつきては其研究を指導せられたスタンレーホール、ジヨルダン兩教授及び單行本として出すに當つて極めて同情ある紹介の勞をとられたゼームス教授等の威望に負ふところ多きと、又一は該書が「現代學術叢書」の一として發表せられたこととの二つの事情が其自身のあるがまゝの價値を一層高むるの目となつたのは、疑を容るゝ餘地のない事實であると信ずる、此事の余が曲解でないことは氏が彼の著を公けにすると間もなく幾多の非難抗論が起り、事實記載の研究に殆んど稀に見る奇觀を呈した、甚しき論難の中にはス氏の純正なる客觀的資料其者すら實は故意の作爲に過ぎないと云つたものがある程である。而して此非難紛出のためでもあるまいけれども泰西諸國に於ても獨逸西南學派の一部（人には奇異に感ずるであらうが、實はス氏はゼームス教授の門生で、又ゼームス教授の「宗教經驗の諸相」には屢ス氏

が引かれて居る)、と米國のスタンレー、ホール氏の統率の下にある「米國宗教心理學雜誌」を中心とする人々の外は眞にス氏の後統を保持して居る者は見當らない様である。尤もス氏と同時に類似の研究をした、リニューバ氏及コー、スツラツトン兩氏著の良著は此種の有力な産物であるうけれども是等の諸氏は寧ろ直接にゼームス、ホール二氏の影響に依ると見る可きであつて、ス氏の行方とは聊か異なるものがある。特に著しき點を擧ぐれば爾餘の諸氏は一層内面的傾向を持つて居る。又現今に至つて何れも一層内面化を企てつゝある。スターバツク氏すら會心の研究以後は統計的調査を試みず、氏の宗教感情の論の如きは全く内省的である況んや大體ス氏の先蹤を追はれたと思はるゝ、飯沼學士も其傳化的統計的結果の價值を限定し、危虞せられて居るのを見ると、これは確かに宗教經驗の研究に於ける自叙傳記的統計的方法の不分なるを吾人に知らしむるものである。

然れどもゼームス、ホール從つてスターバツク氏等の研究方法を以て不充分なりとし、自ら眞實の宗教心理學研究方法を樹立せりと云ふ、ヴント教授の民族心理學的研究法も余は其純客觀的と云ふ點に即して幾多の疑問がある、乍併其究實價值は今論すべき場合でないから、大體に於て承認するとしても、其文化史的根柢は果して民族心理學の要求に應ずる如く完成せられて居るであらうかを疑ふ者である。飯沼學士の統計的方法も此根柢の充分に信頼するに足るものを發見しなかつたが故に特に現代を其調査の範圍とせられたのであると云ふことである、而して氏が余の舊稿が超時處的なるを離せられたのは全然ヴント教授の民族心理學の稍皮相

的なる繼承者の口吻である様に思はれる。乍併余は此場合既叙の考に依つて飯沼學士の研究範圍として撰まれた現代なるもの、所謂時代背景なるもの、價值を重んじない者である。一體現代に對する文化史的研究若くは「現代文化」の概念は一見甚だ明瞭たるが如くであるけれども實は極めて容易ならざるものであると思ふ。否切言すれば「現代文化」又は「現代」と云ふ語は各人區々の考に従ふに止まり學的には何等の確實性を有して居らないものと信ずる。(今現に浮動しつゝあるではないか)此點では既に過去のものとしてせられ一定の時を隔て客觀的に種々討究を經たる過去の幾世代の文化が却つて學的確實性を有するものであつて、從て是を根柢とする過去の文化發展の階段を假定し、其標準に依つて宗教意識の發達を見るのが比較的安全な企であると思ふ。然れば飯沼學士の企圖は若しそが過去の宗教意識發展と對望するなくんば到底通俗的に止まるを免かれないであらう。

次に余は一步を進めて民族心理的研究の背景としての歴史的事實若くは文化階段の性質と價值につき一言したい。ヴント教授も云はれた如く此際歴史的事實は敢て散漫概略と云ふ意味ではないけれども極めて概括的の性質のものである。これを時間的一面につきて見ても歴史的阶段の區別に於ては數十年乃至數百年は世代の上に一大變遷を標識せしむるものとせらるゝけれども、民族心理學に云ふところの人間思想發達の階段と云ふのは、これに比すれば甚だ大略的である。一例を採つて見れば彼原始、トリーテム英雄諸神等の時代と云ふが如き、そが確かに歴史的事實を根柢とするに拘はらず其時間的意義は極めて概括的のものである。狹

量たる史家はヴント教授の此分段を大膽なる企となすであろう。

然も其駁撃は當らない。何となれば其研究對象の性質上かゝる一般的概括的區分に止まることを餘義なくせられて居るからである。特に宗教意識の發達に於て然りとす、宗教上に於ける偉人の影響を考へて見よ、其價值は殆んど時間を超越するかの如くである。釋尊、基督、孔子、其何れか然らざる。其教説は今日尙活躍して居る。現代の人心を確實に支配しつゝある「過去」の意識は勿論あるとしても、それは宗祖の後代人に及ぼす影響の一部分をも損せぬのである。かくの如く今日生ける基督、生ける釋迦、あるとせば其教説は或る意味に於て超時間的と云はねばならん。余が此言は大いに誇張をも含んで居るが事實である。若し人これを許すとすれば余は更に進んで、何故に宗教的信仰は超時間的(超時處的と云ふも可ならん)であるか。思ふに其重大なる理由の一は人類が生物としての進化は割合に遅々たるものであつて人間の所謂歴史的時間の尺度を律するには余りに悠久に過ぐることに、其二は全人類は生物の一種として之を見るときは其外面的差異あるに拘はらず、其體制、習性の何れの方面に於ても大部分は殆んど共通なる性質を有するものであるからであらうと思ふ。比較神話學の事實に依れば特定の神話内容は世界各地に於て何等流傳の痕跡なく、全く獨發的に生じて、然も驚くばかり一致して居る。是等の偶合的類同性の要素は枚擧に暇なき程存在して居る。

若し上の如く思惟し來れば民族的研究の歴史的根柢なるものは歴史的には極めて蓋然的のものであつて其價值は兒童及び青年の宗教意識の發達と相對照して一種の發生的概觀の企圖に止まると

云はねばならん。而して發生的概觀の企圖に止まると云はねばならん。而して其概觀的な點に於ては現代の兒童、青年又は成人の宗教意識につきて統計的に調査するのと大した相違はないのであると思ふ。而して此人間宗教意識一般の考察に便益すべきものであると今一は認識論的に企てらるべきものであるが、其何れの方針を進むにしても深き内的體驗を通じて然も純學的に組織されるべきものであると思ふ。かくの如くなれば宗教學なるものと宗教心理學なるものは極めて近き關係を有することゝ成つて、其分域は僅かに出發點と學問的分業の上のみに限られる程のものとなることかと思ふ。尤も如斯ことは「宗教心理學の意義及職分」と云ふ一個の考察題目を形成するから細論を避けて置く。

上來飯沼學士の研究態度を機縁として氏及び從來の學者に對する余の態度を述べ併せて若干の感想を叙した。蓋飯沼學士が屢々余に開説せられた同學の誼に酬ゆるの意に外ならぬのである。以下少しく本書の内容に就きて概観して見たいと思ふ。

此書の内容は二部に分たれて居る。第一篇は入信の經路を觀察しこれが類型を區分し、これと職業、地位、宗旨、性等との關係を見、次に入信の動機、年齢を見、信仰生活の氣質及健康に及ぼす影響等を考察し、最後に其大體の結果を概括してある。第二篇は現代中流の知識階級が來世觀若くは靈魂觀を自叙法、回問法、等によりて觀察した結果を述べたもので、これに依て現代の模範的階級の人々がいかなる信仰を特つて居るかと云ふ事の一端を知るに便ならしめて居る。

全體に其觀察は精緻、叙述は多趣である、且其間芳烈なる信仰の閃見するあり以て著者が明晰たる知性と共に至純なる信仰を包蔵せる人たるを證して余りあるものである。此書が興ぶるところの効果は著者が屢々明言せられた如く狹義なるものたるにもせよ、徒らに論議のみ専らにして實質なる事實の研究に乏しき我國の此學界に寄與することか渺くないと信する。切に江湖の一談を望む。東京上駒込、心理學研究會出版部、定價八拾錢(石神徳門)

寄贈書籍雜誌

- 佛像の研究 小野玄妙著 丙午出版社
- 哲理と人生 帆足理一郎著 洛陽堂
- 哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、宗教研究、人性、六合雜誌、東洋哲學、東西之光、早稻田文學、學校教育、内外教育評論、普通教育、教育研究、教育學術界、教育界、教育時論、東京教育、京都教育時報、兵庫教育、靜岡縣教育、滋賀縣教育會雜誌、岐阜縣教育、愛知教育雜誌、長崎縣教育雜誌、都市教育、信濃教育、佐賀縣教育、茨城教育、宮城教育、愛媛教育、山形縣教育、密宗學報

大藏經要義 本多日生著 博文館
 社會問題と教育問題 歸一協會編 同

前 號 目 次

| | |
|------------------------|------------|
| 本邦に於ける祖先崇拜の形式及意義の變遷 | 文學士 春山 作樹 |
| ストゥムプの情覺説 | 文學士 野上 俊夫 |
| 象徴と觀念 | 故文學士 岡本 春彦 |
| ロツツエ妥當説の由來(承前) | 文學士 錦田 義富 |
| ミカイロヴスキの社會學説の創始的價値(完結) | 米田 庄太郎 |

彙報